

私と文学・10

ドクトル・ジバゴへのこだわり

旧ソ連の詩人、作家ボリス・パステルナーク著『ドクトル・ジバゴ』。本書でパステルナークは1958年のノーベル文学賞を授かる。だが、東西冷戦下、ソ連政府は発禁処分にしたため、受賞を辞退せざるを得なくなる。その後、ハリウッドで映画化され、高校生のように初めて観た。ロシア革命前後の動乱期を背景に、詩人でもある医師ジバゴと、看護婦ラーラとの道ならぬ関係を軸に展開する物語だ。哀愁帯びたテーマ曲は強く印象に残ったものの、当時の私には少し理解しにくい内容だった。にもかかわらず何度も観ており、観るたびに原作(むろん翻訳)を読んでみたいと思っていた。

数年前、『あの本は読まれているか』(東京創元社)という本が出版された。意味ありげな題名に引かれ読んでみた。「あの本」とは『ドクトル・ジバゴ』を指す。発禁処分の「あの本」をソ連国民の手に

渡し、言論統制を強める政治体制への批判を植えつけようと、米CIAが作戦を企てる。そしてスパイに仕立てられた女性タイピストが戸惑いながらも作戦の任につく……。史実に基づくフィクションだが、曰くつきの本に、更にこのような話が隠されていたとは驚いた。この本に背中を押され、とうとう『ドクトル・ジバゴ』(時事通信社)を手にとった。長篇で読み切るのがかなりの時間を要したが、詩人の魂を謳いあげた崇高にして奥深い物語であることを改めて知った。原作は映画とは違う。たしかにそう思うが、ジバゴが母なるロシアの大地にたえずみ、湧いてくる詩想に心をゆだねる情景は、あのテーマ曲が流れる詩的な映像と重なり、何か新鮮な驚きを覚えた。映画を観る楽しみがまたふくらみ、こだわりが止みそうもない。(其田敏美)

「私と文学」の原稿募集

約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

盛会だった100万人の年賀状展

恒例の「100万人の年賀状展」が新春ロビー展として、文学館1階エントランスロビーで開催された。会期は1月12日から2月11日まで。階段上り口には仙台ならではの立派な門松が飾られ新年の華やかな雰囲気を出している。

自由部門では、昨年大活躍したヒーロー・大谷翔平選手の青い版画が目立った。さらに巳年にちなんで「復活と再生」を象徴する蛇の図柄が多く、期待と意気込みが伝わってくる。テーマ部門の「さくら」には写真や、貼り絵、水彩画など、工夫を凝らした作品が並び、思いの深さを感じられた。デジタルで、手軽に済ませる人が増え、「年賀状じまい」を宣言する人も少なくない。タイパやコスパを重視する流れかもしれない。「来年はぜひ書いて文学館に届けたい」と話す人もいた。手書きの年賀状の価値を改めて見直したいものだ。(一)

文学の杜 仙台文学館 友の会会報 第77号 令和7年3月25日発行

新年度は特別展「山村暮鳥」でスタート

2025年度展示 秋は「樋口一葉」



山村暮鳥(1884~1924) 群馬県立土屋文明記念文学館提供

今春は詩人・山村暮鳥の特別展でスタートします。暮鳥は『聖三稜玻璃』、『風は草木にささやいた』、『雲』などの詩集で知られる群馬県出身の詩人で、明治42年、定禅寺通にある日本聖公会仙台基督教教会に伝道師として来仙します。仕事の傍ら仙台で初めてのパンフレット詩集を編み、仙台の文学青年たちと交流を深め、大正期の仙台の文化運動に影響を与えました。群馬県立土屋文明記念文学館の協力を得て開催する本展では、暮鳥の生涯と作品世界を辿るとともに、暮鳥と仙台の関わりをご紹介します。

幸運な人だけがたどりつける駄菓子屋「銭天堂」を舞台にした物語で、人間の欲深さを描く、毒気のあるストーリーが、小学生を中心に人気です。本展では、作者インタビューや表紙イラストなどの展示のほか、多彩なディスプレイで作品の舞台を再現します。会期中は、市内の文庫の会の方々などのご協力で「お話し会」を開催し、「絵本の部屋」、「手作りコーナー」を展開します。



廣嶋玲子, iyajya / 備成社

「100万人の年賀状展」でスタートし、冬の企画展は、本会報「風と歩こう」の写真でおなじみの写真家・佐々木隆二さんの写真展を予定しています。ことばや物語の世界を写真で表現する佐々木さんは、開館当初より、歴代館長の肖像や文学館の行事、「仙台文学館ニュース」などの写真を手がけてきました。本展では、

風と歩こう 26

春先の早朝、並木道を散歩中に足をとめた。裸木の枝が赤いのは、顔を出したばかりの新芽たちと分かれ、最初はみな赤ちゃんなのだ気づいて楽しかった。新緑の頃、所属していたサークルの大先輩に、活動について手紙で相談のつてもらったことがある。時候のあいさつで、草木の緑色を伝えたいのに、その幅が広がってうまく表現できないことを書いた。大先輩からの返信には「仙台文学館で、たくさん緑を見ることが出来ます」と書かれていた。相談についてもちろんのこと、草木の色への思いも受け止めてもらえたことがとても嬉しかった。

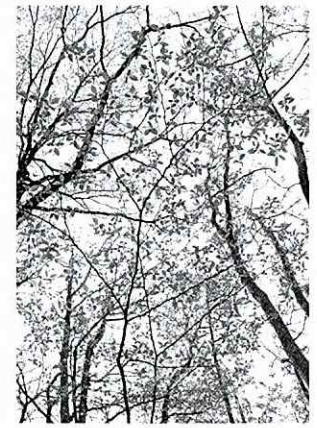


Photo by Ryuji Sasaki

後日、樹木をオーブンスペースの窓辺から眺めてみた。それまで幾度も歩いた文学館の庭。晴れた日で窓ガラスのサイズが大きいこともあるが、その景色に目を見張った。青みのある濃い緑から明るい黄緑までのグラデーションが見事だった。葉の大きさも形状も色合いも異なりながら、各々風に揺れている。そのあと庭に出て根元から樹々を見上げた。(近)

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第77号をお届けします。▽幼い頃、早くこいこいお正月と歌った。職場ではクリスマスアドベントカウントダウン曆を使った。最近中国にも「九九消寒図」があることを知った。9枚の花弁を持つ9個の花、冬至から花弁の1枚1枚を塗り潰していく。81日後には春になる。各々の国で嬉しいことを待ち焦がれる様子が伝わっている。(一)▽谷川俊太郎の訃報にふれ、遅ればせながらその作品世界に注目している。佐野洋子のファンとして、彼女の元夫の詩人と知ってはいいたが、全国紙トップに追悼記事が載ったとき、我が身の認識不足を思ったのだ。図書館には児童書の部屋にも追悼コーナーがあったので、まず絵本からと、しゃがみこんで読んだ。その世界探求は始まったばかり。(近)▽駐車場と隣の隙間にカエデの実生が生えていた。どこまで育つのか、気にして見ていた。それがついに切られてしまった。根元と枝先のない、フェンスを巻き込んだ20センチほどの幹だけが残されていた。太さは5センチほど、しっかりと成長していたのだ。駐車場からの眺めが少し変わった。(和)

文友一滴

本を読む速度が落ちてきた。読書体力が低下してきたのだ。でも、基礎体力の低下を予防できるなら、読書体力も鍛え直せるのではないかと。そこで、本棚の前になつてみた。今まで、何かと助けに手がのびない。今読みたいのは彼らではない気がする。何故だろう。現在と戦後昭和の違いなのか、性のない。家族のあり方、仕事の仕方、性の考え方、かなりの変化があるのは確かだ。美しいと感じるものも変わってきたのだろうか。そんなことを考えていたら、無性に本が、活字が読みたくなった。一番近い、ネット書店に行ってみた。気になったのは上橋菜穂子の「香君」。早速注文した。翌日の配達待ちがきれいな。読書の時間を作るために、洗濯を終わらせ、食事の作り置きをする。忘れかけていたけれど、こんなことも本の楽しみの一だった。ワクワクを沈めるために、と言ったら失礼だが星野道夫のエッセイを手にとった。日常の中に読書という楽しみがある。こんな素敵なことを忘れかけていた。読書体力の低下などと言っているのはいいけない。落ちてきたなら活性化すればいい。筋トレは苦手だが、読書は好きなのだ。本探しが、美味しいもの探しに似ている。ランキングなど関係ない。食べたいものを、読んでみなければわからない。当たりもあればハズレがつきやすいものもある。それでいい。シリーズ物が気に入れば、続きが気になる。好きな作家が見つかれば、追いかける。読む速度は落ちていく。けれども経験は積んでいる。興味の対象も変化している。ネットのランキングなど気にせず、次は現実の本屋に行こう。勘を頼りに、鼻をきかせて、並んだ背表紙と向き合おう。今読みたい本が呼びかけてくれるだろう。(和)

### 友の会随想

「着いた。着いた。」緑にはさまれたスロープを上って仙台文学館を初めて訪れたのは平成二十四年の秋、特別展「井上ひさしと安野光雅」でした。夫婦でお二人が大好きなので興奮しながら拝観しました。婦



り際には井上初代館長の写真にあやかって玄関前でポーズを決めてスナップ写真を撮りました。その後、平成二十六年の日立システムズホール仙台でのこまつ座公演「きらめく星座」観劇が縁でちに仙台文学館友の会の会員に加えて頂き、文学館のお世話でこまつ座の公演を何度か観劇しました。妻と二人の娘は仙台市で学生生活を送

### 仙台文学館と出会って

会員 山下 一

私も仙台には娘の学校行事のほかは年に一、二度ジャズ喫茶やレコード店を訪れる程度でした。数年前には岩手県など東北に縁のある作家の各種受賞が続き、「東北の時代だ」とひとり盛り上がっていましたが、今も

若い頃から本が好きで、井上ひさし氏と丸谷才一氏の特筆に傾倒して、著作を自宅に並べて収蔵しています。今も地元の図書館にせつせと通っては種々の本を借りて読んでみて、気に入ったものは購入してしまっています。買って安心してしまいうタイプなので、他の作家や俳句の本は嫁いだ娘が使っていた部屋を借りて読んでみることにしています。この傾向は生涯変わらなうと我ながら諦めています。

### 第66回読書会

## 献身は至高の愛の形か

谷崎潤一郎「春琴抄」

大阪の富裕な薬師商七代目の二女として生まれた春琴は、幼い頃から容姿端麗、賢く、歌舞音曲に優れた才を持つ評判の女兒であったが、9歳にして失明する。この時鳴屋に丁稚奉公した13歳の少年温井佐助は、以後因らずも春琴の身の回りの世話をする事となる。

生活、趣味、人間関係など春琴は傲慢で贅沢であった。琴三味線の弟子には、厳しい稽古で恨みを買うこともあったが、どんな時も佐助は忠実なしもべの姿勢を崩さず春琴に寄り添う。残酷な事件は春琴37歳の春に起きた。そこで佐助が取った行動は……。

- \* 自分中心でわがままな女に、男がこれほど献身できるものだろうか。
  - \* 春琴に対する佐助の感情が三島由紀夫『金閣寺』の主人公と重なった。
  - \* 産んだ子どもに全く執着しないのは、自分本位な人間だからなのか。
  - \* 表現が魅力的ゆえか、段落の無い長い文章なのに読みにくさを感じなかった。
  - \* 佐助の春琴に対する愛は、信仰のように思われた。
- 2月5日4名出席。(佐)

### 第65回読書会

## 真相へのカギを求めて

ダフネ・デュ・モーリア「動機」

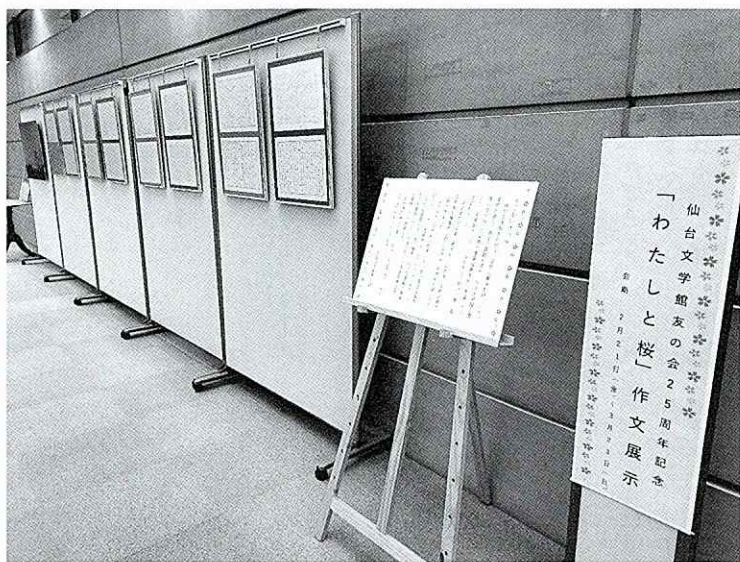
2011年8月に始まった友の会読書会は回を重ねて65回となったが、今回初めて探偵ものを讀んだ。若い裕福な女性メアリーの動機不明の自殺。夫は医者の説明に納得出来ず、妻の死の原因を突き止めるべく探偵を雇

う。彼女が元気だった午前11時20分からリボルバーの引き金を引くまでのたった10分間に、いったい何があったのか？ 謎に迫る探偵ブラッ

「自然描写はあまり無く、心の動きなど人間の有りように迫っている。\* 依頼主への報告は、探偵の優しさの表れ。\* 面白かった。読書会に参加していなければ読まなかった作品だと思う。\* 最後の執事との会話が謎解きのカギであったことと余韻が残る。\* 子どもが死んだと知らされた時の、メアリーの絶叫と記憶喪失が胸に迫る。\* キーワードは作中2回だけ出て来る「ちびの人参坊主」だった。(佐)

次回読書会は4月9日(水)14時遠藤周作『父親』(集英社文庫・講談社文庫)友の会会員は自由に参加できます。申込みは友の会事務局まで。

## 友の会イベント 「わたしと桜」桜と言葉の饗宴



出席者は16人。桜が映し出される正面を開むように置かれた椅子にかけて開始となった。あいさつの後、渡辺会長が3階で開催中の写真展「わたしと桜」がBeautiful」が始まってから1ヶ月余り過ぎた感想を聞くと、大沼さんは「桜の力を感じた」と即答。文学館の受付の方が自主的に色紙を桜の形に切って飾ってくれていた話をされた。写真への思いを自覚した一枚として、2011.3.11の夜に、

「ぼろしか」。出席者は映し出された桜を眺めながら、朗読に耳を傾ける贅沢な時間を味わった。大沼さんのお話は率直で和やか、ところどころユーモラスで笑いがおきた。最後に、南から北までの桜をめぐる自身の作品「写真随想「記憶の道」を、早回しで流すように写した。渡辺会長からの将来についての質問には、「先のことは分からない。でも半分期待して出かける」と答えてから「出かけた先で、何か問題が起ると楽しくなっちゃう」と笑いながら続けた。桜を訪ねることで人との出会いを得ていると語った大沼さん、最後まで温かさにつつまれたイベントだった。

終了後、余韻に浸っていた出席者たちに聞いた感想は次の通りです。  
\* とても楽しく、素晴らしい。  
\* 会場が程よい人数で雰囲気も良かったので、写真と話の両方を堪能できた。  
\* 渡辺祥子さんのやわらかい朗読が心に響いた。  
\* 大沼さんの桜への思いが写真に表れていると感じた。  
\* 写されている人々の暮らしも感動を与えるものになっていた。  
\* 何があっても咲くのだという意気込みが伝わってくる。  
\* 桜を見て北から南へ旅をしたいと思っていたが、今も叶えられずにいる。  
\* 母を亡くした翌年に、夜の森の桜を見に行き、元気をもらった。

2月28日開催 16名参加(近)

仙台文学館友の会25周年イベントは「わたしと桜」をテーマに、会員から募集した作文展示(会期2月21日～3月23日)と、トークイベントの二本立てで行われた。

2月28日(金)午後、会場の2階講習室では受付開始前から、写真家の大沼英樹さんと聞き手で朗読を担当する会長の渡辺祥子さんが、打ち合わせに余念がなく、正面に映し出される桜と朗読の背景に流すマラーの交響曲第5番の音量調整をしていた。ギヤラリススペースに展示してある桜にまつわる作文から、大沼さんに5つを選んで写真と合わせてもらい、渡辺会長が朗読した。

「思ひ出の箱」学校の苦い体験「桜と春風」、石巻の日和山での家族模様「夢かま

